

1970

年代

▶ 1970年代(創刊号～第39号)

三輪知雄初代学長(1973年10月～1976年7月)、宮島龍興第2代学長(1976年8月～1980年3月)の在任期。

『筑波大学新聞』のほかに、『筑波大学学報』(1974年7月)、『Guidance』『Tsukuba Student』(1975年5月)、『筑波大学概要』(10月)、『筑波フォーラム』(1976年3月)なども刊行される。

紙面では、「未来へはばたく 盛況に開学記念式典」「交通問題 これからどうなる? 筑波の足」(第2号)、「特集 再考宿舍問題」(第4号)、「第三学群開設 教育組織すべて整う」「大きくはばたけ筑波大生」(第13号)、「本学初の卒業生」(第15号)、「第1回夏期学内スポーツデー大盛況」(第17号)、「走りだした学内バス」(第20号)、「今春初の学群卒業生 約半数が教育界へ」(第23号)、「筑波大学第二世代へ」(第24号)など、創設まもない筑波大学の躍動感や期待感を伝える記事が多い。

いっぽう、「学園祭実行委員長アピール 自らの手で学園祭を」(第3号)、「指導された民主主義?」(第6号)、「学園祭座談会 問われる大学自治の質」(第8号)、「学園祭開催は大幅遅れか」(第35号)、「実施の方向でほぼ同意」(第37号)、「写真で見る紛糾の学園祭まで」(第38号)など、学生自治や学園祭をめぐる大学と学生間の考えのちがいをうかがわせる記事も散見される。

1980

年代

▶ 1980年代(第40号～第122号)

福田信之第3代学長(1980年4月～1986年3月)、阿南功一第4代学長(1986年4月～1992年3月)の在任期。

筑波大学の組織・施設・研究・教育面の確立期にあたり、「医師国試二年連続で一位」(第52号)、「司法試験に初の合格者」(第56号)、「医師国試三年連続トップ」(第61号)、「国際関係学類が発足」(第69号)などの記事が1面を飾る。

1980年代前半の紙面では、学園祭をめぐる大学と学生の対立を背景に、「第6回学園祭開催できず」(第47号)、「盛り上がった学園祭 社会派企画が充実」(第56号)、「雙峰に三万人の人波」(第63号)、「第9回雙峰祭終わる 目を引く硬派企画」(第72号)、「84学園祭を断念 全代会 本部棟で学生座り込み」(第80号)、「85学園祭 中止状態解除 厚補審決定」(第85号)などの記事が多い。

いっぽう、1980年代後半の紙面では、大学入試センター試験と分離・分割入試、受験機会の複数化などの大学入試制度の変更による受験者数の激減・合格者の流出・受験者層の変化を伝える記事に加え、「死者続出の交通事故 駐車違反にメス」(第65号)、「やはり希薄な交通安全意識」(第81号)、「ごみも問題も山積み」(第111号)、「悲惨! 交通事故」(第119号)など、現在も続いている交通・生活問題に関する記事が頻出する。

1990年代

▶ 1990年代(第123号～第202号)

阿南功一第4代学長(1986年4月～1992年3月)、江崎玲於奈第5代学長(1992年4月～1998年3月)、北原保雄第6代学長(1998年4月～2004年3月)の在任期。

筑波大学の充実期にあたり、筑波大学学内から学長を選出する慣行に新たな新機軸を求める声を背景に選出されたノーベル物理学賞受賞者江崎玲於奈学長(「巻き起こそう 新風を 江崎新学長と2,156人の新入生」第140号)、および文科系から初めて選出された北原保雄学長(「笑顔ほころぶ喜びの顔 北原新学長 2,092人の新入生」第188号)や、大学設置基準の大綱化にともない学群カリキュラムの大幅改正(1992年4月)、博士課程6研究科に近隣研究機関と連携大学院発足(1993年4月)、筑波大学自己点検・評価規則(1994年3月)、国際総合学類開設(1995年4月)、大学院夜間博士課程設置(1996年4月)、工学基礎学類開設(1998年4月)、AC入試・国立大学法人化問題などに関連した記事が紙面を飾る。

いっぽう、「五十嵐助教授殺害される」(第135号)、「痛恨 現地主義の行動派 秋野前助教授タジクで殉職」(第191号)、「本学女子学生殺される 一の矢で搜索続く」(第197号)などの痛ましい記事も見られる。

2000

年代

▶ 2000年代(第203号～第280号)

北原保雄第6代学長(1998年4月～2004年3月)、岩崎洋一第7代学長(2004年4月～2009年3月)、山田信博第8代学長(2009年4月～2013年3月)の在任期。

筑波大学の発展期にあたり、大学院博士課程の改組・改編(2000年4月、2001年4月)、我が国で最初の大学院修士課程の連携大学院方式(2002年4月)、図書館情報専門学群誕生(2003年4月)、筑波大学開学30周年記念式典(同年10月)、国立大学法人化(2004年4月)、学群・学類の再編、総合科目の改編、コア・カリキュラムの導入、グローバル30採択などに関連した記事が紙面を飾る。

いっぽう、「白川英樹名誉教授にノーベル化学賞」(第208号)、「TX Go! Go! 電車が走る つくばが変わる」(第231号)、「29年間お疲れさま! さよなら学内バス」(第247号)、「図書館に喫茶設置 スターバックスが参入」(第266号)などの記事も見られる。

2010

年代

▶ 2010年代(第283号～第300号)

2011年3月11日。日本を未曾有の大地震が襲った。「東日本大震災」は、1万5000人以上の命を奪い、東京電力福島第1原子力発電所の事故は、重大な環境被害をもたらした。事故では多くの地域住民がいまだに故郷に帰れず、いつ終わるともしれぬ辛い避難生活を強いられている。

筑波大学でも、被害は大きかった。

地震発生後、最初の発行となった同年4月25日発行の第292号で、筑波大学新聞は「震災と大学」をつぶさに報じた。同号によると、大学で感じた震度は6弱。多くの施設で外壁落下やガラス破損、漏水などが起き、被害総額は63億円と見積もられた。3月と4月に予定されていた卒業、入学式はそれぞれ中止、延期されている。

同号の白眉の1つは「編集後記」だ。

当時の編集長は地震直後の状況について、「強い揺れで(いったんは)避難した」が「地震1時間後にはカメラを担いで取材を始めていた」と書いた。このジャーナリズム精神が功を奏し、同号は体芸図書館で書架が転倒したり、付近のコンビニの棚から商品が消えた様子などの生々しい写真を掲載している。

筑波大学の立ち直りは早かった。当時を知る大学職員によると、山田信博学長は「大学の本分は教育・研究で、一刻も早く(学校運営を)平常に戻す」と主張。東京の一部大学が5月から授業を始めたのに対し、筑波大学では4月中旬から「平常」に戻ったという。

山田学長は、健康問題から2012年秋、退任を表明。2013年4月に、永田恭介教授(医学医療系)が学長に就任した。